

ねずみ島  
遊泳道場



昭和37年撮影 ねずみ島全景

長崎港口にあるねずみ島がまだ無人の島だったころ、夏休みになると浜辺は子供たちであふれていました。現在は、第二次外港整備計画により埋め立てられ、陸続きになっていますが、昭和47年に閉鎖されるまで、70年もの間、この島に遊泳道場がありました。ねずみ島経験世代にとって、ねずみ島は子供の頃の忘れぬ夏の記憶です。

ねずみ島の位置

ねずみ島は、大波止から4キロ、周囲600mの小島で正式名称を皇后島と言

います。

江戸時代は深堀領でしたが、幕末、イギリスの東洋艦隊が水夫を休養させるためねずみ島上陸を要求してきたとき、長崎奉行は島を買い取って天領とし、上陸を許可しました。明治23年（1890）の新聞に「鼠島海水浴場会社」の定式総集會が行われたという記事があり、ねずみ島は長崎で最初の海水浴場であったようです。

長崎遊泳協会の歴史

明治35年、東洋日の出新聞の社主、鈴木天眼が瓊浦遊泳協会を創立、ねずみ島を遊泳道場としました。天眼と同郷の会津出身で東洋日の出新聞にいた西郷四郎も創立者として名を連ねています。西郷四郎は、講道館四天王の一人で、映画やドラマでおなじみの『姿三四郎』のモデルと言われています。

創立当初は、決まった流儀はありませんでしたが、2代目より熊本から小堀流の主任師範を招き、以後、小堀流が遊泳協会の流儀として定着します。明治42年、創立後わずか7年で、自前で主任師範を出せる力がつき、ねずみ島育ちの田中直治主任師範（6代目）が誕生します。さらに、昭和になると各地遊泳場へ教師を派遣、特に、学習院には数年にわたり派遣するほどになりました。

瓊浦という語は長崎を顕す語ですが、他地方の人にはわかりにくいいため、大正



現在の皇后島(ねずみ島)

2年（1913）、名称を長崎遊泳協会に改めました。

戦争が激しくなり、多数の指導者が徴兵され、昭和19年（1944）に一時閉鎖されますが、昭和22年には早くも再開、ねずみ島の道場は昭和47年まで続きます。長崎遊泳協会は、翌年より長崎市から管理を委託されて長崎市民総合プール（松山）で指導しています。平成16年（2004）には、NPO法人となり、特別指定管理者として長崎市民総合プールの経営・運営・管理にあたっています。現在は、ねずみ島時代の継承である夏季水泳教室だけでなく、幼児教室、成人向けのアクアビクス教室も開催しています。

また、ねずみ島は、危険防止のため小学校3年以上が対象でしたが、プールは、海より安全なため、平成18年には小学校一年から受け入れるようになりました。

長崎遊泳協会は会の目的を「市民皆泳を目的に児童生徒の水泳指導及び小堀流踏水術の伝承に努め…」とうたっています。一般泳法も指導していますが、小堀

流踏水術の伝承は会の大きな柱です。110年以上の歴史を誇る長崎遊泳協会が泳ぎと日本泳法の普及に果たしてきた役割は計り知れません。

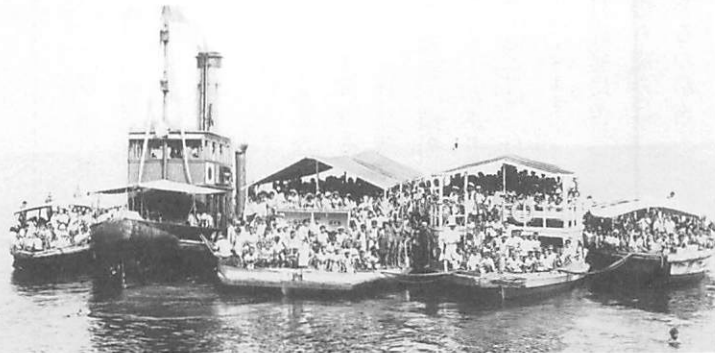
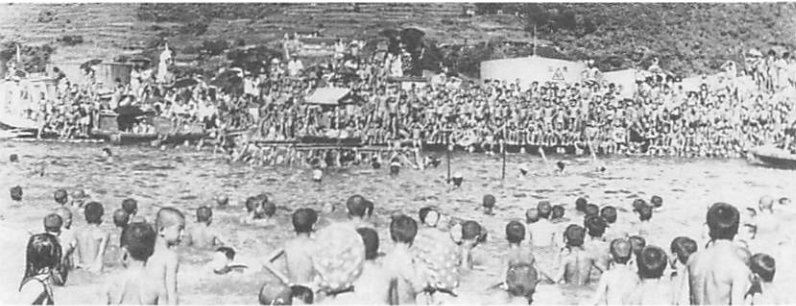
日本泳法と小堀流踏水術

日本泳法は、江戸時代、幕府や各藩の奨励で、武術の一つである「水術」として、武士の間で発展しました。湖や海で、急流や緩やかな河川で、地域の特性に応じた泳ぎの技術が世襲的に伝承されてきました。廃藩置県後は、地域や身分にかかわらず、伝承泳法として各地に伝播しました。

現在は、日本水泳連盟に所属する日本泳法委員会が毎年、日本泳法大会を開催し、各資格認定を行うとともに、各流派の保存、普及活動を支援しています。連盟が公認する流派は、現在13流派です。ねずみ島の小堀流踏水術は1700年頃、武術として泳ぎを奨励していた細川藩の村岡伊太夫政文が確立した流派です。発祥地である熊本をはじめ、長崎、東京、京都、青森で受け継がれています。

小堀流踏水術の基本泳法

- ◎足撃（そくげき）↓水底が判らない浅瀬を渡るとき遊び。
- ◎手操遊（たぐりおよぎ）↓長距離を疲勞少なく移動するための遊び。
- ◎早抜遊（はやぬきおよぎ）↓短距離をより速く移動するための遊び。



上:大名行列(昭和24) 下:崎陽丸と団平船(昭和初期)

◎挺身抜游(ていしんぬぎおよぎ)↓早抜游のさらに高速版。

◎立游(たちおよぎ)↓踏水術の肝の游ぎ。両足で交互に水を踏んで浮力を得、両手を自由にする。

◎水練(すいれん)↓小堀流では潜水を意味する。水中活動には必須。

◎浮身(うきみ)↓游泳術の別科。子供より比重の大きい大人には難しい。

◎休游(やすみおよぎ)↓疲れた時に行う技。

### 伝統の遠泳、大名行列

ねずみ島游泳道場では、創立当初から遠泳を実施してきました。

明治38年、60名もの団体で深堀遠泳を行い、以降、昭和41年まで60回実施されています。

もつと長い距離の有明海横断遠泳にも挑戦しています。大正3年の第一回目、20哩(マイル)の有明海横断遠泳は、成功しませんでした。2年後に8名が長洲から島原のコースで成功しました。昭和39年には43名もの長距離集団遠泳が成功し話題になりました。

大名行列は、細川藩の参勤交代が大井川を渡る時の様子を再現したもので、明治44年に開催された競泳大会の余興として披露したのが始まりです。次第に供回りや雲助を加え、総勢300名超の華やかな行事になりました。

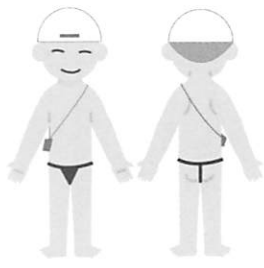
夏休みの終わりになると、訓練の成果として披露しています。周年イベントや大会でも披露され、現在も見物人が押し寄せる長崎の夏の風物詩になっています。

### ねずみ島の思い出

勝山小学校2年から友達に誘われて握り飯の入ったバスケットをもつて、ねずみ島に通った。大波止の棧橋には曳船の崎陽丸に繋がれた団平船(底の平たい運搬用の和

船)が待っていて、30分ほどでねずみ島に到着する。

游泳道場は禪の色と、帽子の色十線泳力が判るようになっていた。最初の年は、白帽子に赤線一本の丁組一班の帽子を被り、家から身に着けてきた黒の禪になつて浜辺に



向かった。笛が鳴ると全員整列し朝礼が始まる。主任師範先生の訓示があつて、「弾丸(たま)で死ぬとも溺れて死ぬな、我ら海の子、日の本の子」という標語を全員で唱和する。戦時色が色濃くなつていた時代だった。意味は分からなかつたが、

汝(な)れ三伏(さんぶく)の暑(しよ)に恐(お)ぢて:云々とねずみ島の歌を歌つた後、練習が始まつた。

3年生の時、対岸の小瀬戸まで往復する丙組一班の試験を受けた。帰りの船に乗っている教師が小瀬戸饅頭を一人一人に放つてくれ、海で甘い饅頭がおいしかったことを覚えている。丙組二班はねずみ島一周の他に泳法の試験があつた。この試験を受ける前にねずみ島をやめてしまったので、乙と甲の試験は分からないうが、甲の何人かが「親指と人差し指の股の間に割りばしを乗せ、2時間の立ち

泳ぎを頑張る」と言っているのを聞き、驚嘆したことを思い出した。 四倉満喜夫(3回生)

### 甲乙丙丁制度

甲乙丙丁の泳力の制度は、明治42年に創られたもので、中学3年までの児童生徒が対象です。甲の上には、初段、助手、班長、助教、教士、師範、名誉師範と指導者の階級があります。游泳協会が公表している初段獲得者名簿には東高同窓生の名前も見えます。在京同窓会初代会長の故光安一夫さん(4回生)はねずみ島の名物班長先生だつたそうです。(田中直英協会理事長談)

### 【謝辞】

長崎游泳協会田中直



2019年1月3日泳ぎ初め(西日本新聞社提供)

英理事長に、資料、情報を提供していただき、また写真使用の許可をいただいて、拙文をまとめることができました。心より御礼申し上げます。(まとめ:井上早苗・17回生)